

スラムの社会組織*

ウィリアム・フット・ホワイト

有里典三訳

長年にわたって、社会学者たちは社会解体の見地からスラムを研究してきた。本稿における私の目的は、この領域の文献を何点か批判的に検討し、スラムの社会生活の分析に[社会解体とは]異なったアプローチを提案することである。

スラムについての関心には主として二つの起源があるように思われる。(1) 社会改良を成し遂げようという熱意と、(2) 都市化のプロセスを理解しようという試みである。チャールズ・ブース¹⁾やB・シーボム・ラウントリー²⁾の研究は、社会改良についての関心を代表するものである。これらの研究者たちは、貧困とそれに関連した諸問題に関心を集中し、労働者階級の生活水準に関する大量の価値的なデータを提供しているが、スラム住民の社会生活についてはほとんど何も述べていない。

[それに対して] 都市化の研究は、[社会改良についてのアプローチに比べると] スラムにおける社会行動の分析により近いアプローチを行っている。未開社会あるいは農村社会 (primitive or peasant society) と都市コミュニティ (the urban community) を対比することによって、多くの著名な社会学者たちは、二つの環境における社会関係の性質を理論化しようとした。たとえば、ヘンリー・メーン³⁾は《身分と契約》による対比を行い、フェルディナンド・テンニース⁴⁾は《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》という概念を使用し、エミール・デュルケーム⁵⁾は《機械的連帯と有機的連帯》について述べている。これら三人の考えは細部では異なっているが、未開社会あるいは農村社会から現代都市へと進化するにつれ、親密な関係を基礎とし神聖なサンクションによって支えられた同質的な社会組織から、異質的で個人化された世俗的社会へと必然的に移行するという点では全員が一致している。そして、三人とも、自分たちの二分法的定式化が理想型だと考えていた。パーソナルな関係がすべて一つのタイプに収まってしまうような社会は、現実にはありえない。にもかかわらず、これらの[二分法的]概念は、村落的な社会生活と都市的な社会生活のあいだに存在する、一般的な違いに注意を向ける際には役に立っている。

一方、ゲオルク・ジンメル⁶⁾は、都市の社会生活の研究に関心を移し、市場経済の支配や合理的でインパーソナルな社会関係の発展といった点に注目して、都市の社会生活を分析した。ジンメルの研究は、この分野におけるその後の考え方にたい

へん大きな影響をあたえた。

都市生活における第一次集団の優越性が弱まったことに注目して、ある社会学者たちは、社会解体という見地からその帰結的状况を分析しようとした〔訳註；パークを中心とするシカゴ学派の都市社会学者たちを指す〕。おそらく、もっともよく知られた社会解体の定義は、W・I・トマスとフローリアン・ズナニエツキが下した定義だろう。彼らは、社会解体は《既存の社会的行動規範がグループ内の個々のメンバーにあたえる影響力が弱まる現象》のなかに見出せると述べている⁷⁾。

都市において個別化とそれによる社会解体が急速に進行しているとすれば、都市内部に存在するこうした現象のもっとも顕著な特徴をスラムのなかに見出せるのではないかと考える研究者たちもいた。R・D・マッケンジーの論文から引用した次の文章は、その分野で一般に認められた見方を示している。

「スラムは、これまで“魂と使命感が失われた地域”であると記述されてきた。あるいは、個人や家族集団が、忌避して当然の人たちと、無理に親しくしながら生活している地域であると記述されてきた。あるいは、外部の権威筋によって押しつけられた規範を除けば、礼儀作法や社会行動の規範が何一つ存在しない地域であると記述されてきた。こうした環境のなかでは、個人には地位もなく、代表的な市民も存在せず、心の通い合いや安心感を求める人間的な欲求も、満たされないままの状態におかれている⁸⁾。」

何人かの社会学者たち、たとえば著名なロバート・A・ウッズ⁹⁾、トマスとズナニエツキ¹⁰⁾、ロバート・E・パークとH・A・ミラー¹¹⁾、そしてルイ・ワース¹²⁾たちは、スラムには固有の組織が存在していると指摘していたが、彼らの発見内容とマッケンジーのスラムについての性格づけとのあいだの対立は、これまでほとんど顧みられることはなかった。そして、研究上の関心は、依然として社会解体に向けられたままであった。

ハーベイ・ゾーボアの著書『ゴールド・コーストとスラム』¹³⁾が、スラム研究の文献のなかでは重要な位置を占めているので、社会解体的アプローチの一つの実例としてこれを検討してみよう。ゾーボアは、スラムについての以下のような一般的な記述ではじめている。

「スラムは自由と個人主義の地域である。広範囲にわたるスラムのなかでは、人びとは隣人のことを知らないし、隣人たちを信用することもない。置き去りになったわずかな家族は別にして、大部分の住民は渡り浮浪者(transient)、すなわち売春婦か、犯罪者か、無法者か、ホボである。よそ者たちは、われわれが西部に行ったときと同様に、お金を貯えるためにやってきて、まとまった金ができるとすぐに母国に戻りたいと思っている。彼らは本当の意味でまだアメリカ人の生活の一部にはなっていない。都市ではできるかぎり安上がりな生活をしたいと願っているので、スラムの間貸し屋に住

もうとする。また、ここには最初の移民居留地、すなわち外国人コロニーもある。そして外国人コロニーには、中国人や黒人のような「好まれない」外国人グループが群がっている¹⁴⁾。」

ゾーボーは、この段落でひとまとめにしたさまざまなスラムをいとも簡単に一般化している。それらのスラムはどれも組織化されていない。だが、その後でゾーボーは、移民者たちのコミュニティが《組織化される》様式について論じている。

「……コロニーが成長するにつれて、移民者はそこに社会的世界を見出すようになる。そのコロニーのなかで移民者は、共感と相互理解と励ましを分かち合うことができる。そこで移民者は自らの慣習や規範を理解し、自らの生活体験やものの見方を共有する母国の仲間たちを見出す。コロニーのなかで移民者は地位につき、集団のなかで一定の役割を果たす。コロニーの通りやカフェの生活において、またその教会や慈善団体において、移民者は心の通い合いと安心感を見出す。コロニーのなかで移民者は、ひとかどの人間として生きていけることや、自分の願望を叶えることができることを実感する。—こうしたことすべてが、外部の見知らぬ世界では実現不可能である¹⁵⁾。」

ゾーボーは続けてこう述べている。

「……この地域の生活が、決して組織化されていないわけではない。ゴールド・コーストには独自のクラブがある。[タワータウンの] 親密な集団は「ムラ」スタジオに集まっているし、外国人居留地には多数の集会所と相互扶助組織がある。スラムには「ギャング団」も存在する。……そして、これらの集団は、それぞれのメンバーの生活において、非常に重要な役割を果たしているのかもしれない。

だが、ゴールド・コーストのクラブを除けば、これらの集団は、全体社会の見地からしても地域コミュニティの見地からしても、間隙的な集団にすぎない。それらは、解体の過程にあるコミュニティを象徴している。つまり、地域社会の共同社会的な側面を表しているというよりも、分断された側面を表している。他方、ゴールド・コーストに存在するクラブの関心は都市的な広がりをもっているが、地域問題については、カジノの舞踏室やラケット・クラブの談話室でかすかな反響を呼び起こすだけである¹⁶⁾。」

ゾーボーは組織化の存在を示す証拠をこのように処理した後で、以下のような伝統的に承認された結論を述べている。

「ニア・ノース・サイド全域で、コミュニティ生活がすでに解体してしまったというわけではないが、今まさに解体しつつある。コミュニティの諸制

度は機能しなくなっている。教会、学校、家族、職業集団、行政機関および新聞と地域生活とのあいだには、いかなる直接的な結びつきもなくなってしまった。行動は極端に個人化されている。世論はまったくといってよいほど存在しない。共通の関心あるいは文化的背景が見られない。その地域のほとんどの場所で、政治的行為を目にすることができない。ニア・ノース・サイドにおける行政は社会的機関と警察の手中にあるが、どちらもほとんどうまく機能していない。人びとの生活もほとんどが解体している——法も全体社会のモースもない状態で生活が営まれている。ニア・ノース・サイドは、現代都市の心臓部に移植されたかつてのフロンティアの一面である¹⁷⁾。」

明らかにゾーボーは、スラムがゲゼルシャフト型の社会関係を代表しているという確信をもって研究をはじめている。先に引用した最初と最後の段落のなかで示されているのがこの考え方である。社会組織の存在を明示したゾーボーの議論は、そもそも「ゲゼルシャフト型の」理想型とは合致していない。しかしながら、それらを間隙的な現象と呼ぶことによって、ゾーボーはその問題に深入りせず、うまい具合にさっさと片付けてしまっている。また、これまでもゾーボーは、地位の高い中産階級や上流階級の人びとに期待されているコミュニティ全体に対する忠誠心を、下層階級の人びとが公言していないとはっきり述べている。つまり、ゾーボーは、社会組織について一般化する際に、下層階級のグループを考慮する必要がないと考えているのである。

また、政治組織についても同様の方法で処理されている。

「ニア・ノース・サイドにおける政治はただのゲームにすぎない。それは、決められたルールをもたずに行われるゲームであり、地域コミュニティにおいて偶発的に行われ、地域生活の諸問題——ほとんど争点と呼ばれることもないものだが——とも、ほとんどあるいはまったく関わりをもたないゲームである¹⁸⁾。」

ゾーボーは、ニア・ノース・サイドに見られるこうした不快な政治状況を説明するために、政治がコミュニティの「争点」をめぐって組織化されていると言われるハイド・パークやウッドローン（中産階級が居住する地域）の状況と対比している。

だが、ゾーボーは、ただ単にスラムの政治と中産階級の居住地の政治とは似ていないと言っているにすぎない。すなわち、スラムの政治が中産階級の道徳的規範にかなっていないので、「ただのゲームにすぎない」と「言っているだけである」。ゾーボーが、スラムの政治がどのようにコミュニティ生活と適合しているのか検討するために、政治組織を研究しようとしなかったことは明らかである。

ゾーボーが観察した下層階級の組織の存在を示す証拠が、一時的なものであり重要ではないと言うなら、そしてその結果、彼が一般化した内容の質を損なうものではないと反論するなら、我々はニア・ノース・サイドの地区計画（the Near North

Side Area Project) に関する最近の文献に言及するだけのことである。ゾーボーが議論の対象に取り上げたこの一帯は、シカゴの地区計画 (The Chicago Area Project) の援助の下に、コミュニティ計画を組織化できる最初の区域として選ばれた場所である。シカゴの地区計画というのは、その区域には [コミュニティ] 計画を推進するための社会生活が組織化されているという前提で作成されている。ニア・ノース・サイドに長年のあいだ住み、コミュニティ計画のリーダーの一人でもある A. J. レンディノ博士 (Dr. A. J. Lendino) は、次のように書いている。

「この [ニア・ノース・サイド] 地区のイタリア人の近隣住区には・・・独特の統一性と強さがある。おそらく、この [イタリア人の] 近隣住区ぐらい多くの住民がお互いに顔見知りの場所は、シカゴ市内のなかにも存在しないだろう。我々はこの近隣住区のコミュニティ生活のなかで、両親の出身地であるシチリア島の小さな町で見つけることができるような同じ暖かさや友情や親密さを、数限りなく経験している¹⁹⁾。」

レンディノ博士は、続いてその地区の高度に組織化された社会生活について記述し、それから《既存の》社会集団がコミュニティ計画を採用し続行する際の方法について議論している。この文書を読んだ人か、そうでなければニア・ノース・サイドの地区計画の諸活動に詳しい人なら、ゾーボーがこの地区に見られる生活上のもっとも重要な特徴をいくつか調べ損なっていると結論せざるをえない。

これまでに示した批判点に対処するには、[既存の] スラム研究の性格をかなり変更しなければならない。基本的に、[スラム] 研究の新しい方向づけが必要とされているように思われる。すなわち、最初の肝心な点は、異なったタイプのスラム地区のあいだには、明確な違いがあるという認識を確立することである。一方では、ゾーボー²⁰⁾が詳しく記述した下宿屋地区 (the rooming house district) が存在している。下宿屋地区に住んでいる人びとは、お互いにほとんど日常的な付き合いをしていないので、こうした地区には主として社会組織が見られないと主張するのは適切である。しかし他方で、レンディノ博士が述べているような移民者の居留地 (the area of immigrant settlement) も存在している。ここでは移民者たちが家族集団で住み、精巧な社会組織を作り上げている。これら二つの [スラム] 地区は、人口が密集し、住宅条件が劣悪で、住民たちの収入が低いという点ではお互いに似通っているが、こういったフィジカルで経済的な指標に注目したところで、社会学的な分析に必要とされる相違点は得られない。社会生活は一方の地区と他方の地区とでは基本的に異なっているので、こうした二つの [スラム] 地区をひとまとめにした上で、いかに一般化を図ろうとしても、必ずや無益で誤解を招く結果となるだろう²¹⁾。

私の主たる関心はスラムの家族地区 (the slum family area) にあるため、スラム研究を新たに方向づける必要があるという私の議論も、このタイプの地区に限定されている。この議論に具体性をもたせるためには、こうした地区に存在する社会組織の重要な特徴を何点か浮き彫りにする必要があるだろう。私が利用するデータ

は、「コーナーヴィル」というイタリア系のスラム地区を対象とした三年半におよぶ研究から得られたものである。そして、その研究成果については、『ストリート・コーナー・ソサエティ』²²⁾という著書のなかで詳しく報告している。シカゴの地区計画にかかわった人たちとの議論によると、[この著書における]私の結論は、一般的に他の移民家族の居留地にも当てはまるようである。

[移民の]子供たちは両親が内面化した規範を身につけていないので、移民の家族集団は解体する傾向があるとこれまでもしばしば指摘されてきた。ここでの[親子のあいだの]対立は実際の対立であり、家族解体の多くの実例はこの点を強調するために引用されてきた。しかしながら、解体の事例ばかりに[研究関心を]集中させると、事態を歪曲化することになる。[その証拠に]私は、コーナーヴィルにおいて、忠誠心というもっとも親密な絆を保持している多くの家族を知っている。親と子の双方が適応すれば、世代間の対立は最小限に少なくなる。レンディノ博士は、対象地区に見られる家族の絆の強さについて論評し、同じような状況を紹介している。

長年のあいだ、社会学者たちが関心を集中させてきたのは、社会が要求していることにうまく適応できなかった個人や家族であった。だが、我々に今必要なのは、個人や集団がうまく社会関係を再編成して、対立を調停した場合の方法を研究することである。

さらにまた、社会学者のなかには家族解体の研究ばかりに気をとられて、スラムに見られるような組織化の程度を過小評価する者もいた。そして、暗黙のうちに次のような前提、すなわち、家族だけが親密でパーソナルな関係を組織し、個人の行動を統制することができる唯一の集団である、という前提が作られる。少年非行の問題を議論するなかで、トマスとズナニエツキは次のように述べている。

「……—とりわけ大都市ではそうだが—大部分の移民の子供たちは、かれらの行動を社会的にまったく規制していないような家庭状況やコミュニティ状況のなかに置かれていて、その名に値する生活組織が何一つ子供たちに押しつけられていない。移民の子供たちが置かれた状態は、正確に言えば、道徳的に退廃した状態ではない——というのは、道徳的な退廃は道徳的システムの喪失を前提としているが、移民の子供たちには失うべき道徳的システムなど何一つないからである——彼らが置かれている状態は、純然たる「無道徳状態」である。もし個人の徳性が、所与の性格構造に影響をあたえる社会教育の産物であれば、もっとも極端な状態に置かれているこうした個人には、善きにつけ悪しきにつけ、徳性が身につけていないだろう²³⁾。

もし今、有効な生活上の組織を何一つ内面化していない事実上の無道徳な少年が、アメリカの複雑な都市生活のなかに投げ込まれたとしたら、彼がただ本能や気分のままに行動するだけだとしても、それはごく当然の結果である²⁴⁾。」

このように、両親の監督から自由になると、少年は〔異性と〕出歩いて、気まぐれな一個人として非行を犯すと一般には信じられている。だが、フレデリック・スラッシャー²⁵⁾やクリフォード・ショー²⁶⁾、ならびに他の社会学者たちの研究は、これが真実でないことを証明している。ほとんどすべての非行が少年たちの集団によって引き起こされている。換言すれば、少年の行動は組織化されていないのではない。それは——ギャング団によって——組織化されているのである。

家族の絆から解放されると、必ずしもコミュニティ生活全般にわたって解体が生じるというわけではない。たとえば、平原インディアンの部族 (the Plains Indian tribes) のなかには、年齢別に等級化された社会システムをもつ部族がいる。その社会システムでは、成員資格を売る男性に個人が自分の妻を一時的に譲渡することによって、すぐ上の年長者の集団の成員資格を買い取っている。〔この平原インディアンの部族社会では、〕家族の絆を犠牲にして、年齢集団がコミュニティ活動において支配的な役割を負っているのである²⁷⁾。〔このように〕異なった人びとが、自分たちの社会組織のうちの異なった集団を強調している。そのため我々が、第一次的な結合を生み出す組織力を手にするために、いつどこでも家族に依存しなければならぬと考える理由は何もないのである。

たしかに家族は、ヨーロッパの農村コミュニティで果たしているような役割をスラムの社会生活を組織化する際には果たしていないが、それとは別の集団がスラムに現れて組織化〔の役割〕を果たしているのである。〔たとえば、〕スラッシャーによって詳細に記述された街かどのギャング団は、その地区の青年たちを動員しているし、スラッシャーやジョン・ランダスコ²⁸⁾が指摘したように、そのコミュニティ全体におよぶヤクザ組織や政治組織の下部組織を形成している。そうした街かどのギャング団のインフォーマルな絆は、パーソナルな関係のネットワークを提供したり、より大規模な組織を基盤とする互惠的な義理関係のネットワークを提供している。

ヤクザ組織や政治組織を望ましい規範からの逸脱物として捨て去る社会学者は、そのためにスラムの社会生活のなかの主要な要素をいくつかを見落としていることになる。たとえば、ヤクザ組織や政治組織が、スラムに存在する大小のインフォーマル集団を統合したり調整したりする場合の役割である。また、それらの組織がメンバーのために果たす諸機能も見落としている。アイルランド系の移民者たちやその後遅れてやってきた移民者たちは、アメリカ都市の社会経済的構造のなかで、自分たちの居場所を見つけることにもっとも腐心してきた。移民者やその子供たちが、いくつかの大都市に存在する政治組織の支配を受けずに今日ほどの社会移動を達成できたなどと、一体誰が信じるだろうか？ 同じことがヤクザ組織についても言える。政治活動やヤクザ活動は、民族的な背景や階層的地位の低さのために「立身出世」を妨げられている個々の移民者に、これまで社会移動の重要な手段を提供してきたのである。

もし社会解体が「既存の社会規範の影響力が減少すること」であれば、そしてここで言う規範が、移民者たちが生まれ育った農村社会の規範であるとすれば、スラ

ムは確かに解体地域である。しかしながら、それは実態の一部にすぎない。スラムを古い集団や古い社会規範の崩壊という見地からのみ研究しても得るところは少ない。なぜなら、そこには新しい集団や新しい社会規範が生まれているからである。スラムに住む大多数の青年たちは、政治組織とヤクザ組織と街かどのギャング団によって牛耳られた社会的世界に参加している。それこそがスラムに住む青年たちの社会的世界であり、彼らはその世界を理解している。この社会的世界の内部でも地位をめぐる競争は存在しているが、その競争にしても[そのスラム]固有の規範に従って行われている。こうしたスラム固有の規範を受け入れない者はその地域で[他の住民と]対立することになるが、こうした個人の割合はごく少数である。[スラムに見られる]主な対立は、スラムの組織化された生活とやはり組織化された「社会的地位の高い」中産階級の社会とのあいだの対立である。

ずっと以前に、チャールズ・ブースは、ロンドンの一教区で観察された貧富間の関係を次のように記述した。

「……彼らは貧しさのために同情された。キリスト教の名において訪れる人びとは、自分たちが見出した苦悩を救済しようと努める。二つの務めが、自然に、そして神の徳によって結ばれるように見える。心が和み、感謝の気持ちが高ぶる。こうした雰囲気の中で、貧しい人びとの注意が神へと向けられる。罪がとがめられ、美徳が称えられる。そして、酒びたりと浪費と愚行が戒められる。助言と援助と譴責がすべて受け入れられる。貧しさにあえぐ人びとは、力強さだけを見出せる世界へと駆り立てられ、宗教の遵守をもはや怠らないように励まされる²⁹⁾。」

ブースは、疑いもなく、中産階級や上流階級の社会規範を下層階級の人びとに適用している。ブース以後のスラムの研究者たちは、たしかに専門用語についてはより一層洗練させてきた。だが、彼らの多くは、暗黙のうちに、[ブースと]同じ規範的アプローチ (the same normative approach) を [スラム研究に] 適用しているというのが本稿の命題である。「善良な」とか「邪悪な」といった用語は、「間隙的」とか「解体」といった用語に取って代わられてしまったが、基本的な考え方については依然として同じままであった。私は「間隙的」とか「解体」という用語を使う場合の正当な場所があることを否定しない。ただ私が反対しているのは、スラムに組織が存在するという明らかな証拠を考慮しない手段として、これらの用語を使用することに対してである。スラムの社会組織の特徴は、社会的再組織化 (social reorganization) のプロセスを調査するために、より多くの社会学者たちが社会解体から研究上の力点を移したときにはじめて理解できるだろう。

私がここで提案した研究の新たな方向づけは、メーンやテンニースやデュルケームの概念図式と関係したもっと包括的な用語を使って表現することもできる。彼らの概念図式が都市化のプロセスに適用できないと論じているのではない。私はただ、スラムの家族地区を理念型のゲセルシャフトと混同すべきではないと指摘して

いるだけである。あるいは、内集団と外集団という概念によって、その状況を分析できるかもしれない。内集団の内部では、パーソナルな関係は親密なゲマインシャフト的な性格をもっている。個人と外集団との関係は、インパーソナルなゲゼルシャフト的な性格をもっている。小規模な未開社会ないし農村社会では、その社会のすべての人口を、ある意味では内集団と呼ぶことができるかもしれない。もちろん、パーソナルな関係のなかにも、さまざまな程度の親密性が存在しているのは当然だが。[それとは対照的に、] 非常に人口密度が高く異質的な都市社会では、内集団に所属できるのは人口のほんの一部だけである。

都市社会は、一般的には未開社会の部族と比べるとより一層個別化されてはいるが、[だからといって] 都市社会が単なる個人の集合体からできあがっているわけではない。人間は——都市においてさえ——集団生活を営んでいる。[したがって] スラムの社会学の課題は（ほかの場所と同様に）、内集団における諸個人の相互関係のあり方を確定し、次に、その社会を構成している集団間の諸関係を観察することである。このためには、社会学者は一人の参与観察者となって、スラムの社会生活におけるもっとも親密な活動を調べてみる必要がある。社会学者はこの[研究の] 道筋を辿ることによって、[スラムに存在する] 多くの対立と不適應の証拠を見つけるだろうが、かつてはスラムのいたる所に存在すると考えられていた無秩序な状態を見つけることはないだろう。

〔原註〕

*本稿は第37回アメリカ社会学会の年次総会（1942年12月）のために準備したものである。

- 1) *Life and Labour of the People of London*. London: Macmillan & Co., 1892-1904.
- 2) *Poverty: A Study of Town Life*. London: Macmillan & Co., 1901.
- 3) *Ancient Law* (4th American edition). New York: Henry Holt, 1884, pp.163-165.
- 4) *Fundamental Concepts of Sociology* (translated and supplemented by Charles P. Loomis). New York: American Book Co., 1940, pp.37-39. (フェルディナント・テンニース/杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』上・下、岩波書店、1957年)。
- 5) *The Division of Labor in Society* (translated by George Simpson). New York: Macmillan & Co., 1933. (エミール・デュルケーム/田原音和訳『社会分業論』青木書店、1971年)。
- 6) *Die Grossstadt und Das Geistesleben* (translated by Edward A. Shils). Second Year Course in the Study of Contemporary Society, University of Chicago, selected readings, 8th ed., 1939. (ゲオルク・ジンメル/松本通晴訳「大都市と心的生活」[鈴木広編『都市化の社会学』[増補版] 99頁-112頁所収、誠信書房、1978年)。
- 7) W. I. Thomas and Florian Znaniecki, *The Polish Peasant in Europe and America*. Boston: Richard C. Badger, 1920, IV. 2.
- 8) "The Neighborhood: A Study of Local Life in the City of Columbus, Ohio," *American*

- Journal of Sociology*, XXXII, 506, 1922.
- 9) *The City Wilderness and Americans in Process*. Boston : Houghton Mifflin & Co., 1898 and 1902.
 - 10) W. I. Thomas and Florian Znaniecki, *op. cit.*
 - 11) *Old World Traits Transplanted*. New York : Harper & Bros., 1921.
 - 12) Louis Wirth, *The Ghetto*. Chicago : University of Chicago Press, 1928. (レイ・ワース / 今野敏彦訳『ゲッター』マルジュ社, 1981年)。
 - 13) Harvey W. Zorbaugh, *The Gold Coast and the Slum*. Chicago : The university of Chicago Press, 1929. (ハーベイ・W・ゾーボー / 吉原直樹・他訳『ゴールド・コーストとスラム』ハーベスト社, 1997年)。ただし、本文中の訳文については、筆者の訳によって多少変更してある。
 - 14) *Ibid.*, p.128. (同上訳書, 149頁)。
 - 15) *Ibid.*, p.141. (同上訳書, 162-163頁)。
 - 16) *Ibid.*, pp.192-193. (同上訳書, 223-224頁)。
 - 17) *Ibid.*, pp.198-199. (同上訳書, 227頁)。
 - 18) *Ibid.*, p.194. (同上訳書, 225頁)。
 - 19) Unpublished manuscript.
 - 20) Harvey W. Zorbaugh, *op. cit.*, p.82. (前掲訳書, 94-95頁)。
 - 21) もちろん、これら二つのタイプが、スラムの社会組織において考えられる変種 (variations) をすべて網羅しているわけではない。これらとは別のタイプの社会組織も調査して、その特徴を明らかにすることも必要である。
 - 22) William F. Whyte, *Street Corner Society: The Social Structure of an Italian Slum*. Chicago : The University of Chicago Press, 1943. (ウイリアム・F・ホワイト / 奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣, 2000年)。
 - 23) W. I. Thomas and Florian Znaniecki, *op. cit.*, V, p.295.
 - 24) *Ibid.*, V, p.313.
 - 25) *The Gang*. Chicago : The University of Chicago Press, rev. ed., 1936.
 - 26) Clifford Shaw, Henry D. McKay, Leonard Cottrell, and Frederick M. Zorbaugh, *Delinquency Areas*. Chicago : The University of Chicago Press, 1929.
 - 27) R. H. Lowie, *Plains Indian Age-Societies: Historical and Comparative Summary*. New York : Anthropological Papers of the American Museum of Natural History, XI, part XIII, 1916, p.919.
 - 28) *Organized Crime in Chicago; Part III of the Illinois Crime Survey*. Chicago : Illinois Association for Criminal Justice in Cooperation with the Chicago Crime Commission, 1929.
 - 29) *Life and Labour of the People of London*, Third Series, Religious Influences, VII, 45. London : Macmillan & Co., 1904.

付記

本稿は、Whyte, William F. 1943. "Social Organization in the Slum," *American Sociological Review*, vol. VIII, pp.34-39の全訳である。原著者のホワイト (コーネル大

学名誉教授)は、昨年(2019年)の7月16日に86歳で他界した。我々は、生前のホワイト教授の業績に対し心からの敬意を表するとともに、ささやかな追悼の意味も込めて、本論文の邦訳を公表することにした。本論文を翻訳の対象に選んだ理由はいくつかある。そのなかでも、ホワイト教授の事実上の代表作であり、社会学史上の記念碑的業績ともなった『ストリート・コーナー・ソサエティ』(奥田・有里共訳、有斐閣、2000年)の《構図》を読み解くために、この論文が必読文献と考えられること。さらには、今後、都市エスノグラフィーの《新たな地平》を開拓するために、当該分野の研究者がまず最初に参照すべき重要文献の一つと考えられることなどが、選択の主たる理由となったことを付言しておきたい。

なお、翻訳と出版にあたっては、著作権者のキャスリーン・キング・ホワイト女史(W. F. ホワイト夫人)ならびに御子息のマーチン・キング・ホワイト氏(ハーヴァード大学教授)から許可をいただいた。記して感謝の意を表したい。